

Title	斷中の語義について
Author(s)	小野, 勝年
Citation	東洋史研究 (1959), 17(4): 499-505
Issue Date	1959-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/148122
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

斷中の語義について

小 野 勝 年

入唐求法巡禮行記にしばしば用いられている斷中という言葉は、他の文献に全く見られぬものであり、從來から人の注意するところとなつてゐるものであつて、行記の英譯者ライシャワー教授も、この語について左の様な脚註をほどこしておられる。

Ennin repeatedly uses 斷中, especially during his travels afoot, to mean a midday pause, usually for the purpose of eating the "forenoon meal."

(Ennin's Diary, p.172)

これによると、圓仁は午食をとる目的から、午時の休息を行うための意味で、この斷中という言葉をしばしば用いていて、それはとくに徒歩旅行の場合に多いというのである。しかしこれではいまだ語義の説明が充分ではないように思われるので、少しく蛇足を加え、ここに叱正を仰いで

みたい。

さてここで先ず行記をひもどいて斷中の用例を二・三擧げてみよう。卷二の開成五年二月二十一日の條にあるのが初見であるが、それによると

廿一日。早朝。入惠聚寺。權覺住處。北院安置。齋時、赴惠海寺極樂院斷中。

と見え、以後凡そ七十回に及んで用いられている。この中で多數を占めている例は、ラ氏も注意しておられるように歩行中の場合であつて、例えば同月二十六日の條には

早朝。出招賢館行卅里。到龍泉村斜山館斷中。

とあり、あるいは、翌三月十二日の條のごとく、平明發。向西行卅里。到主徐村羨慶宅斷中。便發行卅里。到黃縣界九里戰村。とか、さらに同十四日の條には、發行卅里。到圖丘館王家斷中。主人初見不肯。每事難易。終施鹽菜。

周足。齋後行十里。到喬村王家喫茶。行廿里。云々と見える。これらの例によると、某所を出發して、行くこと二十支里、某所の某家または某宅に至つて斷中するといふ書きかたがもつとも多い。さらに到るの下に入の字を付けた場合もある。すなわち開成五年四月八日の條においては早發。正西行廿五里。到臨濟縣。入尹家斷中。

とある。それは申すまでもなく、某所に到りさらに某家に入つて斷中したという記し方である。しかし、これは前者と、意味においては別に變りがない。これに對して一定の場所にとどまつている場合にも用いられる。それは上掲二月二十一日の條のごとく、某所の某宅に赴むいて斷中すといふ書き方である。この他に以下の様な例もある。

〔開成五年三月〕四日。國忌。使君・判官・錄事・縣司等。惣入開元寺行香。使君・判官等。〔於〕庫頭喫茶。喚求法僧等賜茶。問本國風俗。齋時赴張家請。日本三僧〔及〕當寺典座僧到彼斷中。

〔同年同月〕卅日。赴蕭處士請。到宅斷中。

〔同年五月〕十八日。赴善住閣院主請。到彼斷中。

〔同年七月〕十九日。隨頭陀。赴女弟子眞如性請。到宅

斷中。

とあるもので、某の請（まねき）に應じ、その宅に到て斷中するといふのである。あるいは又、開成五年三月六日の條のごとく、ただ午時。共合寺僧一十餘人又斷中。とか五月十五日の條のごとく、於城内劉家斷中。飯食如法。齋後入善光寺見尼衆戒壇。といったものもあり、前の例が概ね到るとか赴くとかいつて行動的な意味をより多く表現しているのに對し、これは斷中したそのことのみを述べるにとどまつている。

さて斷中という言葉が齋と關係の深いものであることは某所某宅に到つて斷中し、齋おわりて云々とか、齋後に云云とか記し、齋の終了したのちに次の行動をおこしている書き方がもつとも多く、あるいはまた齋時某所に赴きて斷中すというように、いずれにしても文の前後には食事と關係のあることを示している場合が多いのである。文面の上に食事の意味が見えないのは、例えば上掲の、午時、合寺の僧一十餘人と共に又斷中すとか、王徐村義慶の宅に到つて斷中すとか、あるいは臨濟縣に到り尹家に入つて斷中すとかあるのが、その例外であるに過ぎない。又某の請に赴き

て斷中すと記している例のごときも、一見したところでは食事と關係なさそうに見えるが、ここで用いている赴請の文字そのものに矢張り施食と關係があるように思われる。禪林象器箋にも再請の語義を説明して

再請。舊説曰請受食也。再請者再受食也。

と見え、すなわち僧侶をまねい〔請〕て法事を營む場合、布施や齋なしですますということはちよつと考えられない。

中に就いて開成五年の四月廿一日の條のごときは

早發。正北行卅里。到鎮州節度府。入城西南金沙禪院。不見斷中。有二僧。見客嗔慢。撥遣數度。強入院中修。飢。主人歸心。自作餽餽與客僧。齋後向正北行廿里。到使庄楊家宿。

とあり、斷中を見ずというような珍らしい文例を示しているが、これも斷中齋の略であつて、最初これを得ることができなかったことを述べたものと思われる。もつともそのことについては斷定を急がず、むしろ別の方面から斷中の意味を考えることによつて自ら明かとなるであろう。

思うに釋尊は生産にたずさわることのない僧侶に對し、種々の規律を定めて守らしめた。食事に関するものも勿論

これにふくまれていた。それについては五分律に興味ある説話を掲げているが（第八初分墮法）、さらに薩婆多毘尼毘婆沙によると

非時とは日中より後夜の後分に至るまでを名づけて非時となす。晨より日中に至るまでを時と名づけるは何をもつての故ぞ。日はじめて出で、すなわち日中に至る。明うたた盛なり。中すなわち満足するを以つての故に名づけて時となす。中より後夜の後分に至り、明轉じて滅没す。故に非時と名づく。また晨より日中に至つて、世人は事業を營務し、飲食を作る。この故に名づけて時となす。中より後夜の後分に至つて燕會嬉戲し自ら娛樂す。時に比丘遊行すれば觸惱するところあり、故に非時と名づく。また晨より日中に至つて俗人は種々の事務あり。姪惱發せず。故に名づけて時となす。中より後夜の後分に至るまでは事務休息し、姪戲言笑す。もし比丘出入し遊行せば、あるときは誹謗せられ、もろもろの惱害を受く。名づけて非時となすなり。また比丘は晨より中に至る、これ乞食のときにして、まさに聚落に入りて往來遊行すべし。故に名づけて時となす。中より後夜の後分に

至つてまさに靜拱端坐し誦經坐禪し、おのおの、所業に當る。これ行來し聚落に入るの時に非らず。故に非時と名づく。(第七・九十事第三十七)

と見える。齋とは巴梨語の Uposatha の譯であつて、釋氏要覽卷上、中食の條によると

起世因本經云。烏哺沙陀。隋言增長。謂受持齋法。增長善根故。佛教以過中不食名齋。

と説いている。和訓で齋をとき(時)と呼ぶのもこれによつてうなずくことが出来るであらう。果してしからば、齋とは過中不食のこととなる。そして僧侶に對し食事を供養することを設齋とも齋會ともいうのである。また僧齋ともいい、食事の供養を受ける僧侶の人数が多い場合だと十僧齋・百僧齋あるいは五百僧齋、乃至は千・萬僧齋という名も生じた。これらの僧齋は何らかの供養のための法會に伴うのが普通であるが、ことに忌日の法會などの場合がもつとも多い。釋氏要覽卷下、住持の條をひもとくと、それについて以下の様に記している。

人亡每至七日。必營齋追薦。謂之累七。又云齋七。けだし、人が死んで七日目毎に齋會を設ける習俗は何時頃

からはじまつたか明かでないが、佛教と共に印度で行われ、中國に及んだのであらう。梵網經卷下にも、父母兄弟和阿闍梨の亡滅の日および三七日乃至七七日にもまたまた大乘の經律を讀誦講説し、齋會して福を求むべし、とある。

唐代に一般にこうした七日目毎の齋會が俗間に多く行われたことは全唐文卷二〇六姚崇の遺令誠子孫文に、すべからく俗情にしたがつて初七より終七に至るまで、七僧齋を設けることをゆるす見え、また圓仁も愛弟子惟曉の死を弔うため三七日齋・五七日齋・七七日齋を營んだことが行記の卷四に記されている。ことに四十九日の忌は一に満中陰又は盡七日などともいい、今日に至るまで東亞の佛教徒の間で廣く行われているものであるが、別にこれと呼ぶのに現在の中國で斷七ということのあることを井上氏や竹田氏の支那語辭典によつて知るのである。例えば後者には

斷七 (Tuan chi)。死後四十九日目に僧侶を招いて供養すること

と説明している。これらは商務印書館の辭源からの轉載と思うが、いずれにせよ、この斷七は遺令誠子孫文に見える終七または盡七日などと同義語であることがうなずける。

しかも入矢教授の示教によると、斷七の語はすでに元曲「神奴兒」などにもあつて、必ずしも近來の新語ではないようである。こう考えてくるならば斷中の斷は斷七の斷と同じ用例であることが確實で、かくて終または盡などの意味を持つていることが知られよう。佩文韻府にも斷梅という言葉をあげ、陸游の詩に

輕雷レキレキたり斷梅のはじめ

とあり、郷人は梅雨に雷あるをいいて斷梅というと注している。わが國でも梅雨のころ雷鳴するとすでに梅雨が明けたと俗に語り合つたりする。斷梅はしたがつて梅雨の終り、又は梅雨明けと譯してよいのであろう。かくてこうした用例から推して斷中とは終中または盡中とも置き換えうることとなるのであつて、午の終りであり、午明けを指した言葉ともなり、しからばこの斷は斷火・斷獄の斷とも異なる。

要するに僧侶の戒律にとつて重大な時と非時とを劃することが斷中であるのである。しかもこれを劃する主な意味は齋すなわち僧侶の食事と関係があることは勿論であるから、ただ時を劃するばかりでなく、斷中齋の略としての斷中という場合も往々あるのである。

さてここで注意したいのは、中の字が午の意味であることは前に述べたが、斷中の中は必ずしも一般的な時間としての午を現わさないことである。例えば開成五年四月の條には、

十一日。卯時發。正西行卅里。午時。到黃河渡口。時人喚爲藥家口。、、、此藥家口多有舟船。食載往還人。每人出五文。一頭驢十五錢。河南屬齊州禹城縣。河北屬德州南界。過河北岸斷中。四人每人喫四碗粉粥。主人驚恠。多喫冷物。恐不消化矣。

とあり、禹城縣と德州との境を流れていた黃河を渡るとき、たまたま河南で午の時刻になつたが、斷中したのは渡し舟で黃河の北岸に到つてからであつた。餘程の空腹だつたと見え、驚かれるほど粉粥を喫している。佛家が戒法の立場から、守る中は必ずしも時間通りにはゆかない。特に頭陀などに出る場合はそうである。上にも觸れたように圓仁らの午前中の行程として普通二十五里乃至三十里を歩行するのであるが、時によつては四十里に及んだ場合もある。そういう場合、午時を經過するようなことも當然ありうる。さらにまた主要交通路上には十里乃至十五里などの間隔單

位で宿舗が置かれたり、丁度休憩や宿泊に便利なところには旅店などが出来ているのであるが、行程時間の狂うのは別に不思議ではない。

斷七の場合と同様な意味から斷中は平常の住寺生活に用いられてよい言葉と思う。また他の文献に實例が残っていないけれども、恐らくそうした場合もあつたであらうが、齋時の狂うことからすれば頭陀中の方が甚だしいので、上記したように行記にも、専ら山東河北山西方面の旅行中に用いられているのではあるまいか。したがつて當時も旅行中には斷中あるいは斷中齋という語を用い、一般にはただ齋とのみいつていた慣習があつたかとも推測されないではない。なお開成五年三月二十五日に青州の節度副使の張員外（名は未詳）に對して圓仁が送つた齋の食糧を請う手紙に左のごときものがある。

日本國の求法僧の圓仁。

齋の糧を施したまわんことを請う。

右の圓仁らは遠く本國を辭して、釋教を訪い尋ずぬ。公驗を請わんがために未だ西東することあらず。到るところ家ごとに飢えたるがために、情に忍び難く、言音の別

なるに縁つて、専ら乞ふこと能わず。伏して望むらくば、仁恩もて香積の餘供をば捨し、異藩の貧僧に賜らんことを。先きごろ一中を賜わりしも、今更に惱亂しまつる。

伏して深く慄愧し、謹みて弟子の惟正を遣して狀しまつる。謹みて疏ぶ。

すなわち、ここに先きごろ一中を賜うとあるが、これは三月二十三日に、たまたま圓仁が節度判官蕭慶中のまねぎで、その宅において齋せんとしていたとき、節度副使の張氏が使者を遣して喚び、六七人の官吏らと共に州の進奏院において改めて齋したことを指している。さて一中という語は時々使用されるものであつて、この意味については僧道忠がすでに禪林象器箋の言語門に項を設けて説明している。

それによれば中座（主人のおるところ）一筵の義だとも、あるいは一堂または一座の義だともいうが、特に高僧傳卷十二釋法莊傳の

元嘉初。出都止道場寺。性率素。止一中而已。

とあるのを引用して、忠曰く、これに日中、一食を言うなりと説明している。たまたま古清涼傳を披見すると、卷下支流雜述の條にも、

余幸曾遇「聶世師」。一中同飯。觀其動止。實異常流。而凡得飯食。必分讓上下。

とあり、一中同飯なる文字も見えるから道忠の説明はさらに正確さを加えたといつても差支えないであろう。しかれば斷中の方は一日における最後の食事であるという意味が強調されているのに對し、この方は特に午時一回の齋食を強調しているのであらう。これに對して、午前中に普通行ふような場合だと、單に齋とのみいつたものであらう。開成四年四月七日の條などにおいては、巳時すなわち十時前後に食事を行つた後は、午後二度茶を喫したのみで、他には別段食事らしいものをとらないのであるが、そこでははつきり齋と記している。もつともこの記事は圓仁がいまだ海州地方におけるときのことと、果して斷中という言葉を知つていたか否か疑わしいのであるが。

東洋史研究叢刊之六

契丹古代史の研究

東北大學教授 愛宕松男 著

體裁總クロース製 本文三七〇頁 定價九〇〇圓

〔内容〕

第一篇 キタイ共同社會の靜態的構圖

耶律・蕭二姓の本質 キタイ八部の構造

第二篇 キタイ氏族制の起源とトーテムリズム

トーテムリズム序説 アジア諸種族のトーテムリズムに關する

覺書 キタイ部族のトーテムリズム キタイ氏族制の起源

第三篇 古代キタイ社會の歴史的考察

部族名キタイ＝契丹語源考 北朝期のキタイ族―氏族單位

の時代 唐代に於けるキタイ族―大賀氏キタイ―フラトリ

―活躍の時期 唐代に於けるキタイ族―遙輦氏キタイ―統

一部族の時代 キタイ部族制國家

國家成立以前のキタイ部族の歴史、特にその社會史をめざす本書は、著者數年來の研究が一應の結論をえて發表されたもので、右の内容目次のような構成をとつて、そのトーテムリズム・氏族制の起源・フラトリの實態・部族結成の過程・部族編成の内容・公權力發生の由來、および原始國家の形態などを主要テーマとして論じるものである。

右書御希望の方は本會宛お申込下さい(國內送料當方負擔)

東洋史研究會

On the Sense of the Word Tuan Chung 斷中

Katsutoshi Ono

The word tuan chung which we often meet with in Ennins' Diary is never found in other literature. It has been noticed, but not fully explained. The aim of the present paper is to make clear the meaning of the word from the examples shown in the itinerary and the buddhist customs of the T'ang dynasty.